



新

ほっとらいん

VOL. 54



長田 弘

ふるふきの食べかた

自分の手で、自分の一日をつかむ。

新鮮な一日をつかむんだ。スガはいつていない一日だ。手にもってゆったりと重い。いい大根のような一日がいい。

それから、確かな包丁で一日をざっくりと厚く切るんだ。日の皮はくるりと剥いて、面とりをして、そして一日の

見えない部分に隠し刃をする。火通りをよくしてやるんだ。

そうして、深い鍋に放りこむ。底に夢を敷いておいて、冷たい氷をかぶるくらい差して、弱火でコトコト煮込んでゆく。

自分の一日をやらかに。静かに熱く煮込んでゆくんだ。

こころさむい時代だからなあ。

自分の手で、自分の

一日をふるふきにして

熱く香ばしくして食べたいんだ。

熱い器でゆず味噌で

ふうふういつて。

意味ある人をつくるために

そもそも「学歴」と「学校歴」は違う。

「学歴」とは文字どおり「学びの歴史」であり、その人が何を学んできたか、どこに旅して、誰の話聞いたか、何度口惜しい涙にくれたか、何冊の本を読んだか、どれほど美しい詩歌に接したか、みんな学歴である。学校の場合、「どの」学校で学んだかではなく、「何を」学んだかが重要なのだ。こういう考え方に基づく教育が、「意味ある人」をつくるのである。

静岡県は、石川嘉延知事の発案で、平成十年に「静岡県人づくり百年の計委員会」をつくり、いち早く教育改革に本腰を入れている。

故・草柳大蔵が会長をつとめた委員会は「意味ある人をつくるために」という提言書をまとめた。

「意味ある人」とは、「何かができる人」「精神的に自立している人」「思いやりのある人」の三つの条件を備えている人のことだ。

「意味ある人」をつくるには、まず、これまでバラバラだった家庭、学校、地域が子どもを中心に同心円を描くように協力しあうことである。

これまでは、家庭が悪い、いや学校のせいだ、いや社会の問題だ、それぞれが他に責任転嫁してきた。いい加減に犯人捜しはやめて、

問題の根本から考え直すことが必要である。

学級崩壊はすでに二十年前から始まっている。その要因の一つは偏差値教育で、教育システムの中に、偏差値の高い高校・大学へ行っ高給取りになる、という道筋しかつくってこなかった。不登校児は学校にいと、僕が僕でなくなる」という思いを抱いているが、偏差値教育は人間の能力の九パーセントしか対象としていない。それ以外にそぎ落されてきた九パーセントの能力に光をあてて、エンカレッジ(鼓舞)していく、そういうパラダイムの転換がいま必要だと思ふ。

偏差値教育の弊害に対して、政府も二十年ほど前から「ゆとり教育」という方向性を打ち出し、大学の規制緩和、高・中・小の学習内容の軽量化などを図ってきたが、その答は学力の低下でしかなかった。

今や中学二年生の国際学力テストでは、日本は三十六カ国中、三十四位という惨憺たるありさまだ。どんなに学科数を減らし、「ゆとり」を持たせても、ついてこれない子についてはこれないのである。

やるべきことは、偏差値教育をもたらしこの社会の人間評価のパラダイムを変えることだ。人間には各人がそれぞれ天からもらった持ち味がある。それを昔は

「福分」と言った。その「福分」に生きることを目指す社会にしようじゃないかというのが、教育のパラダイム転換のポイントである。

柳田国男が昭和九年に書いた「美しい村」というエッセイがある。美しい村なんていうのは、はじめからあろうはずがなくて、人々が美しく住もうと思つてこそ村は美しくなるのである」と書いてある。戦後の地方行政は人々に美しく住むことを要求しないで、箱物で町づくりを行つてきたが、それは間違っていた。

そこに暮らす人々が「意味ある人」になり、自分の家の前の道路を掃き、水を打つ。

それは美しい町に、村になる。それは同時に新しい公をつくることになる。人間は一人では生きられない。誰かに生かされて、また自分も誰かを生かしている。その総和が公という精神エネルギーに結びつくのである。

今までの人づくりのパラダイムは、一つの高い山をつくることを目指していた。これからは連山方式。低い山かも知れないが、それぞれの思いを達することできる「福分の山並みをつくることを目指す。それが「意味ある人」づくりということに他ならない。

（教育は強制と反発から出発する）



Illustration = Takehiro Maruyama

夕張ショック

北海道夕張市の財政破たんは、全国に衝撃をもたらした。自分が住むまちがある日突然、「倒産」する。そんな事が起きうることを突きつけたからである。

夕張市が抱える借金の総額は、六百三十二億円。財政規模の十四倍ほどになる。三月六日に国の同意を得て財政再建団体となる見通しで、これにより、同市は国の管理下に置かれ、来年度から十八年間かけて約三百五十三億円の赤字の解消を目指す。

同市は、六十年代後半にエネルギー政策の転換で市を支えた炭鉱が相次いで閉山。かつて全盛期十二万人以上の炭鉱関係者が働いていた町の人口は一万三千人弱と十分の一まで過疎が進んだ。そこで、「たんこう(炭鉱)からかんこう(観光)へ」を合言葉に、「石炭博物館、遊園地などハコモノ事業を次々と起こし、町を再生しようとした。

字補てんの増大などで、財政負担が増加した。金融機関などからの一時借入金などを使った不適正な会計処理で、赤字決算を先送りしたが、実質的な赤字は膨大になり、昨年六月、自主再建を断念し、財政再建団体申請を表明した。

市が、「これまでの不適正な財政運営を深く反省し、市民の理解と協力も得ながら財政再建に取り組む」として公表した再建計画は、住民には「過酷な負担」となり、「血も涙もない」と、悲痛な叫びが上がったという。無理もない。十一ある小中学校は二校に統合され、図書館も美術館も市営球場も廃止。市立病院は縮小される。一方で市民税や固定資産税などを軒並み引き上げ、保育料は一人年に約十二万円ほど上がり、下水道使用料も倍近くにアップする。福祉

不安な時代を考へる

町内会長を議員にして、議会の日だけ日当を払えばいい

や教育、観光への補助金は軒並み打ち切られる。ゴミ収集は有料化し、障害者などへの扶助費は市独自の積み金をやめる。これによって、年間十六万円(年収四百万円、四大家族で試算すると)の負担増となる。住民は全国最大の負担で、最低のサービスしか受けられなくなる。

「人ごとではない」「わが町は大丈夫なのか」と全国に激震が走った夕張ショック。

「人ごとではない」「わが町は大丈夫なのか」と全国に激震が走った夕張ショック。

自分の住む街の財政状況をしっかりと知ることから始めなければならぬ。職員の数や給与は身の丈に合っているのか。自治体が出資する公社や第三セクターは健全なのか。とっかかりになるのは自治体のホームページだ。財政状態などかなり詳しい数字が出てくる。



黄色いハンカチのロケ地



六期二十四年にわたって君臨し、利益に群がる業者や親族に囲まれた前市長が、「観光都市」と無謀な投資を続けたことが一番の問題であるが、財政規律の責任感のない市の幹部の責任も重い。それらの財政実態を把握していな

それにしてもひどい。人口一万三千人ほどの人口で、百九十三億円という財政規模というだけでも、異常と思うのが普通である。歳入内訳の五二%が中身不明な諸収入で、歳出の四八%が、投資・出資金・貸付金だとすれば、誰もが、おかしいと思っただけで、止められなかったのか、いくらなんでも、これでは議会がないのも同然である。

政治家の責任は重い。当時の市長は任期を終え、退職金を受け取った後に、死去している。さらに総務省のホームページから「市町村財政比較分析表」を開けば、簡単に同規模自治体と比べられる。コメントも参考になる。



夕張メロン

政治家には責任を取らず、ツケは責任のない住民に回ってくる。財政再建団体への転落は住民の連帯責任とされ、最終的には住民も主権者としての責めを負う。行政サービスの低下のほか、地価の下落による資産の減少も避けられまい。「お任せ」にしていた市民につけが回ってくる。

住民が賢くならないとひどい目に遭いかねない、と夕張に教えられる。(中国新聞)

二元代表制と監視機能

左の絵のように、わが国では、国は議院内閣制、地方は二元代表制となっている。



で、合議制が採用される。県の場合、行政の長は知事であり、県の方針(条例や事業予算など)を提案し、県議会がそれを審査し判断する、それに基づいて知事が県職員に仕事をさせるということになる。

▼議会は最終意思決定機関

地方の二元代表制は、行政の長(首長と議員をそれぞれ選挙で選ぶということであり、アメリカの大統領制に近い。

行政の長は一人であるから単独であるのに対し、議員は複数

議会は何のために存在し、議員の任務とは何か。

法的な性格を言えば、議会は、その地方自治体の最終の意志を決定する機関ということです。

すなわち、首長が提案する内容などの是非を判断し、福井県としての意志(方針)を議決・決定する機関ということになります。

議会の存在意義

議員の任務とは、かみくだいて言えば、行政を監視する役割といえます。

行政が正しい方針の下に、納税者の視点に立って、最小の負担で最大のサービスが提供できている

か、予算に忠じた効果が上がっているかどうか、健全な経営、運営が出来るか

チェックし、問題があれば改善させたり、議員自らが積極的に提案し、首長の方針に盛り込ませるということをしなければなりません。

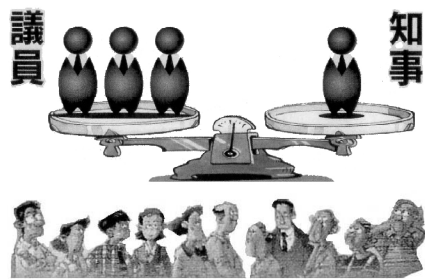
▼パイプ役からチェック役

先に、夕張市の財政破綻を見ました。行政を監視する役目の市議会が、決算書も読まず、その

任務を果たさない、そんな程度の議会なら、町内会長を議員にして、議会のときだけ、日当を払えばいい、という厳しい批判を浴びたようだが、(も)つともな指摘だと思わざるをえない。

これまでの地方議員は、行政に住民の要望を伝え、政策に反映できれば「手柄」になった。が、平成の大合併、三位一体改革などで状況が大きく変わった。自分で課題を読み解く能力が不可欠だ。財政をはじめ、政策の評価や解説ができない議員は今後、退場を余儀なくされるだろう。すでに危機意識を持った自治体議会で模

二元代表制 地方議会



索が始まっている。(自治体議会改革フォーラム、広瀬法大教授)

夕張市の場合は、じゃぶじゃぶ湯水のごとくお金を使って破産した例だが、全く逆に、何も政策を打ち出さず、通常経費だけ支払っていたら、お金がなくなったというような行政もあれば、毎年恒例の年間行事を開催していれば、効果があるなしに関わらず、仕事をしていると錯覚している行事消化型の行政もある。これらの行政を批判・検証できない議会も役目を果たしているとはいえない。

▼三選不出
馬の鳥取県の
片山知事は、

不可欠な議会改革

地方分権をすすめる上で、議会改革が不可欠という。

地方分権によって、従来、中央官庁の官僚が決めていた予算や財源の配分、あるいは権限行使が自治体に移る。誰が配分権や裁量権を行使するかといえ最終的には議会だ。首長はもろろん重要なプレーヤーだが、すべてを決められるわけではなく、最終的には予算の承認も条例の議決も議会が行う。そのときに住民のみならず、人たちが決めるの?と疑問視されるような状態では分権は無理。けれども、そう思われている議会が多いのではない

私は分権を進めるとすれば、議会改革は不可欠だととらえている。たとえば、議会のあり方を多様化してみたらどうか。ごく普通の市民が無報酬で集まって議会を構成してみる。あるいはプロの議会とアマチュアの市民によって構成される議会の二院制にしてもいい。

(議会改革の推進力)

それは草の根の市民。現在の議会に違和感を待ったとすれば、市民が行動しなければいけない。

議会の使命は、

自治体のシステム管理

に費やしているのに、それで県政改革につながらなかったらもったいないし、投資効果が低い。

分権というのは、遠方にある権限や財源を身近に引きつけ、それを住民がコントロールできる仕組みにすること。最終的には、議会を通じて住民が行政をコントロールできるようにする。これが真の分権改革だ。議会を軽視している総務省の中からは議会改革の案は全く出てこない。

(決算審査)

決算を詳しく分析することによって、政策課題に有効な対策を講じてきたかどうか分かる。成果や無駄な点を吟味し、次年度以降の財政運営に反映する。これが本当の行政評価。ところが以前、議員のみなさんは予算には一生懸命だが、決算には無関心に近かった。

決算審査だけでなく、各議会で議員から出された提案や批判、質問も言い放して終わらないように財政課でリスト化し、その質問等に対する県の対応状況をすべてホームページに掲載している。そうすることによって議会での議論が生きてくる。

正直、副議長より、その方が良かったのだが、気ままも言えず、一年交代の役職では限界がある。しかし、それが一番身近で一番難しい改革かもしれないが...

西川県政を検証する

知事のマニフェストをどう評価するか

お役所仕事との決別

従来の「お役所仕事」は、どちらかといえば、慣例に従って、あるいは、国から言われるまま、事業を行事消化しているような風潮があり、果たして、それらの事業が成果を上げているのか、自分の地域に適しているのか、予算に見合うだけの効果があるのか、というような視点に欠けていました。

つまり、何のためにするのかという目的と達成すべき目標を明確にして事業を行ない、その結果、どこまでやれたのか、成果が出たのか、事業を継続することは適当かどうかを見て考える、反省するということが、十分ではありませんでした。

営業目標があり、個々人にも獲得目標が与えられる民間企業にとつてみれば当たり前のことですが、「倒産しない、首にならない、人の金(税金)」というお役所独特の体質による風潮といえます。特に、「お上」としての歴史からか、よほどのことがないかぎり、失敗やその責任を認めない、厳しく総括できないのも大きな特徴です。

しかし、近年、危機的國家財政の下で、地方財政も厳しく、

「小さな政府」、「官から民へ」、「市場原理」の名のもとに、お役所体質にも大きくメスが入れられてきました。

地方自治体の首長が選挙を戦うに当たって、従来の選挙公約から踏み込んで、マニフェストが提唱され、スローガンのような公約ではなく、より具体的に、数値目標を掲げる候補者も出てきました。

西川知事もその一人で、選挙で当選されました。当選後は、そのマニフェストで掲げた目標を実行するため、県の幹部職員に契約させ、NPM(ニュー・パブリック・マネジメント)という役所に民間経営手法を取り入れて、この四年間の県政を執行されてきました。

目標を持たせたこと、成果を評価すること、このことに取り組んだことは、従来のお役所仕事との決別、県庁の体質改善という点で、大きく評価されるものです。

時代の転換期に、果敢にそのことに取り組んだことの評価は、いくら強調しても過言ではありません。

その上で、マニフェストにつ

いて、私が思うことについて書きます。

マニフェストについて

先にふれたように、時代の転換期、県庁改革という面で、画期的でした。

しかし、マニフェストの持つ危険性もあります。

まず、第一点は、選挙で当選したとこと、知事のマニフェストをいえないということ。対一のよな首長選の場合、単に対立候補がよくないということでの消去法による投票もある。第一、どの程度の人がマニフェストを読み、理解して投票したのか疑問がある。従って、知事が選挙戦で掲げたマニフェストを県民が了解したというには、県議会の同意が必要であるが、その手続きを拒んでいる。

マニフェストを具体化するときに、議案として、議会に提案するという点で、マニフェストに掲げた全体目標、数値目標設定の是非を問うことは異質のものである。当選後は、マニフェストの修正にも、胸襟を開いて応じ、目標を県民全体のものにしていく必要がある。

第二点は、目標設定の仕方である。たとえば、一日にご飯を三食食べるとか一週間に二冊本を読むとか、簡単な目標は立てたが、早朝、毎日、仏壇にお参りするとか、掃除をするとか、禁酒するとか、できないような難しい目標は立てないということもある。

娯楽の目標や健康のための目標はあるが、勉強の目標がないということもある。

個別の目標はあっても、肝心要の本人は何をめざしているか目標がないということもある。毎日の目標や日程を定めても、そもそも船ほどに方向が定まっているかわからないのでは、話にならない。

つまり、中期の目標があつて、今日の目標があるのであつて、福井県の中長期ビジョンを持たないということの問題がある。確かに、従来、行政改革大綱とか、中期ビジョンとか、それ自体をつくるのが目的となつて、膨大な時間を要する割には、外部に発注して作らせたたりして、何の実効性も意味ももたなかった経験もある。めまぐるしい情勢の中

で、中期ビジョンが立てにくいことも事実である。しかし、次の時代を予測し、それに向かつてどうするのか、というものがなければ、「私たちは、これまで一体何をしてきたのか」ということになりかねない。

環境問題など重要で、従来の便利であればいい、安ければいいという針路(価値機軸)を見直さなければならぬ。

第三は点数稼ぎになりやすいということ、掲げた数値目標を達成することだけに気を奪われ、数値ではかれない、金銭ではかれないものの価値を見失いかねないということ。

第四は目的と手段ということである。行政は総合行政であり、住民福祉の向上をめざすことが目的であり、諸行事を開催するというのは手段である。抽象的な目標をより具体化する、その結果、具体目標が目的化

するという恐れが生じる。そのことが逆に全体を見えにくくさせたり、あたかも成果を上げているように、「ごまかしやすくなつたりする可能性がある。

西川県政の四年は、マニフェストに掲げた目標に沿って、相應の仕事が出来たという評価である。

しかし、従来のお役所仕事から脱却し、中央官庁からの指示をじつと待っている従属型から、自分たちで政策を考え、決定し、不合理なことは国に改善策を提案していくようになってきて本物である。そのレベルに至っていないとは思えない。

成長過程、発展段階であるから、何ともいえないが、中途半端な表面上の点数稼ぎのようなパフォーマンスにだけはならぬようにしてもらいたい。

もちろん、私は議員として、そういう視点からチェックし、提言していきたいと思うのであるが…。



ノーブリー

ノーエター

副議長のランブ



新緑の眼

選手として試合に出場しなければ、エラーすることもなければ、PKをはずすこともない。何もしなければ失敗はしない。何かするから批判も起きる。

「行政の不作為」が問題になった事例は薬害エイズ事件など数多い。行政が何もしなかったことによつて、被害が大きくなったり、巨額の損失額を計上したりしなければならぬことになる。敦賀のゴミ処分場をめぐる福井県の廃棄物行政もその一つといえるが、お役所のみならず、政治家にもそれが見られる。

かつて、二・二六事件など軍部

が台頭して、政治家の命が狙われた時代に、軍部を批判した代議士、齋藤隆夫の「肅軍演説」は、命がけの演説で、言わなければならぬことを言わなければならぬ時に恐れずひるまず発言する勇氣ある政治家のお手本として、語り草となっている。

「私の時代の人々は、何かを『したい』と考えた。今の人たちは、何かに『なりたい』と考えている」。世間の評価よりも自分の価値観を優先させたといわれるイギリスのサッチャー元首相が娘にそう語ったようだ。

「政治家は次の時代を考え、政治屋は次の選挙を考える」という言葉があるが、政治家も世間の目を気にして、いかに人から嫌われないように、悪くいられないように生きるか、ということが行動基準となつてしまひ、

挙句の果ては、役所にも好かれようとして、首長批判、行政批判もできないという、何のために議員になったのか、議会そのものの存在意義を問われかねない言動をする輩もいる。

▼「行蔵は我にあり、毀誉は他人にあり」。批評は他人の自由。全ての行動と責任は我にあり。幕府の重臣でありながら、幕府を解体させる役目を負い、新政府で名利を得るとは何事かと、福沢諭吉に非難された勝海舟が答えた言葉。

あてにもならない後世の歴史が、狂といおうが、賊といおうが、そんなことはかまうものか。要するに処世の秘訣は「誠」の一字だ。

人がなんと言おうと、人からどんな最低の評価を受けようと、自分の心に照らして「誠」と思えるコトを断じて行う。行蔵は我にあり、毀誉は他人にあり。かくありたい、と、私も強く思います。

▼最近、政治家に大物がいないなつたという、嘆きの声を聞く。評価を気にする政治家も小さいが、評価者が「幹」と「枝」を誤れば、「本末転倒」の政治家を輩出することになる。

かつて、荻生徂徠は、「人材に瑕瑾あり、瑕瑾なきは人材にあらざ」と言った。瑕瑾とはキズ、すなわち欠点のことである。玉には瑕がある。したがって徂徠は欠点など見る必要はないと言ったのだ。

思い出すのは、詩人の茨木のり子。師と仰ぐ金子光春が女道楽だったので、他の詩人から「あなたもその方面を習ったら」と言われたとき、「あなたたちは金子の

何処を見ているのですか、枝葉末節など関係ないでしょ」とピシャリと言ったというエピソードである。

副議長のランブ

役所に入ると、どこにでも首長をはじめ三役、正副議長の在室を知らせるランブがある。

しかし、福井県庁には、副議長のランブがなく、不思議でならなかった。議長のランブがあつて、副議長のランブがないというのはありえないし、知事があつて、副知事があれば、当然、副議長もなければならぬ。

最近、副議長に就任した何人かにも言ったのだが、自分が就任したときに、自分で要請することに對する気恥ずかしさとか、何か言われたり、笑われることを心配したことだろう、誰もしなかった。

しかし、問題は、そういう個人的なものではないのである。二元代表制として、最終意思決定機関としての議会を代表して、単独の部屋をもって、陳情を受ける立場であれば、対等に同様にしなければならぬということである。

結局、私が副議長に就任してから、ランブを要請した。しばらく時間を要したが、副議長のランブが掲示されるようになった。その時になって、議会事務局から聞いたのは、「かつて、副議長のランブはあつたのだが、どなたかが副議長になった時、ゴロ新聞に追いかけ

られて、ランブを取り外した」ということだった。何の問題意識もないまま過ごせば、間違つた前例が踏襲され、それが慣習となる。

ものごとの基本、原理原則を知らないことは恐ろしいことでもあると思つたのである。

現状に合わなくなつたからと言って、安易に、歴史と伝統あるものを変えることには、賛成できない。しかし、中には、いつのまにか道しるべが反対方向に向いていようなこともある。

その点を心得て、常に点検していく作業を怠つてはならない。「副議長のランブ」など、どうでもいいようなことである。が、この些細なことでも、「ない」ものを「ある」ように、自分で、実現しようと思えば、それなりに、「ちよつとした勇氣」が必要なのである。

私の問題意識の中で、福井県議会の慣例を変えることや知事部局との関係における諸慣例に関する見直しを、この間随分と主張してきたが、まだ半分も実現できていない。

文書を朗読し合う代表質問や一般質問のあり方、県職員が居残りの答弁書作りなど様々ある。常任委員会や特別委員会については、次期の議会から改善する予定となつたが、牛を押していくように粘り強く行かねばなるまい。ランブのように、小さくてもやれるところから。



闘う県議会をつくる

なんでもかんでも、アメリカや東京のものさしで計られ、「安さ、便利さ」の価値だけで果てしなき競争を強いられれば、強い者はより強く、弱い者はより弱く、地域のエネルギーは地域外のムゲタカ巨大企業に吸い取られてしまいます。

グローバル化によって、生活の領域までもが単なる利潤追求の手段とされるようになり、私たちの地域の食文化や生活文化、歴史、人間関係など大切な価値が失われようとしており、その影響は、私たち自身の精神と身体にまで及んできています。

当たり前前に働けば、当たり前前に暮らせる地域社会・経済をつくらなければなりません。安心して暮らせる地域社会・経済を再構築するため、歩いていける範囲に生活圏を取り戻し、人と人がコミュニケーションする街をつくるため、画一的な中央政策から脱却した県議会独自の政策を立案し、県民の最終意思決定機関としての闘う県議会をつくりします。



「ものは多ければいい」「安ければいい」「速ければいい」「便利であればいい」「儲かればいい」、それが豊かさであり幸せであると思っていました。

しかし、気がつけば、人々から大らかさが消え、社会が荒^{すび}んできたように思います。

本来の目的は、誰もが人間らしく安心して暮らせる社会をつくることにあったのに、いつの間にか目的と手段の倒錯が起きたようです。

何を大切に、何に力ネを使うのか。何が大切にされる社会をつくるのか。

税金の配分も

行政のスリム化

も、もう一度この

原点から考え

なおしてみなければ

なりません。

「農は命」「工

は活力」「商はに

ぎわい」「住はやすらぎ」のみなものです。

部分でなく大局を、景気だけでなく経済を、そして

何よりも人間を！

歩いていける範囲に生活圏を取り戻そう。

人と人が「コミュニケーション」する街を取り戻そう。

強くつややかなまちを創る



新緑の気ままにトク

峠

真壁仁

峠は決定をしいるところだ。

峠には訣別のためのあかるい憂愁がながれている。

峠路をのぼりつめたものは

のしかかってくる天碧に身をさらし

やがてそれを背にする。

風景はそこで綴じあっているが

ひとつをうしなうことなしに

別個の風景にはいつてゆけない。

大きな喪失にたえてのみ

あたらしい世界がひらける。

峠にたつとき

すぎ来しみちはなつかしく

ひらけるみちはたのしい。

みちはこたえない。

みちはかぎりなくさそうばかりだ。

峠のうえの空はあこがれのようにあまい。

たとえ行手がきまつていても

ひとはそこで

ひとつの世界にわかればならぬ。

そのおもいをうずめるため

たびびとはゆつくり小便をしたり

摘みくさをしたり

たばこをくゆらしたりして

見えるかぎりの風景を眼におさめる。

卒業式シーズンである。我が家の下の娘たちも中学を卒業する。

最近、高校入試でも学校推薦というのがあるようで、それでも面接試験のようなものはあるらしく、問答集があるのか、私に「円高とはどういうことですか？」といった質問を投げかけてくる。

「推薦入学について、お父さんはどう言いましたか？」

「そんなもん、無投票当選みたいなもんだ」と言ったら、推薦されても落選(う)する子もいるように、無投票当選ではないことをやたら強調していた。

数ヶ月前のことだが、その娘たちが、私の部屋をせっせと掃除してくれたのが嬉しくて、翌日、小躍りして早く帰ってきてドアを開けたら、見知らぬ男の子がいて、「こんにちは」とあいさつするので、愕然としてしまった。

掃除の目的がそういうことだったと知って怒り心頭。夜になって「何だ、あの豆腐に石ぶつけたような、物干しに三日つるしておいてもスズメもカラスも突つかないような顔をした男は」と言い放った。その後、どうなったのか顔を見ないが、ちよつと大人げなかったかも知れない。それでも、「ワイシャツのボタ

ンをつけてくれ」と頼んだら、針箱を持ってきて、つけてくれた。

でも、針箱は何日過ぎてても置きっぱなしだった。



▼「あとみよそわか」。

幸田露伴の次女、幸田文が書いてる。「もういいと思つてから、もう一度よく呪文をと覚えて見るんだ」。

露伴は、娘に、「あとみよそわかあとみよそわか」と呪文を唱えさせ、立ち去る前に、あとを見なさいと教えている。

八才で生母を失った文は、掃除だけでなく、家事一般を父親から習ったようだ。

幸田露伴は兄弟の多い貧困の中に育つて、朝晩の掃除はいうまでもないこと、米とき・洗濯火炊き、何でもやらされ、いかにして能率を上げるかを工夫してきた。

「はたきの房を短くしたのは何の為だ、軽いのは何の為だ。第一おまえの目はどこを見ている、埃はどこにある、はたきのどこが障子のどこへあたるのだ。それにあの音は何だ。学校には音楽の時間があるだろう、いい声で唱うばかりが能じやない、いやな音を無くすことも大事なのだ。あんなにばたばたやつて見る、意地の悪い姑さんなら敵討がはじまつたよつて駈け

出すかも知れない。

はたきをかけるのに広告はいらない。物事は何でもいつの間にかのしごとができたかというように際立たないのがいい。」

ことは機嫌をとるような優しさと、稜のような痛さをまけて、父の口を飛び出して来る。

「ふむ、おこつたな、できもしない癖におこるやつを慢心外道という。」

こんなふうになんかを躰けてみるのもいい。幸田文が掃除を習ったのは十四歳と言ふから、まだ間に合うのだが、とても自信は無い。叱つたら、ブーンとどこかへ消えるような気配である。

▼PTAの広報の担当の方から、卒業生に贈る言葉を書いて欲しいというメールが届いたので、A4一枚書いたら、2、3行でよくて大幅削除して、山本有三の「心に太陽を持って」、吉野源三郎の「君たちはどう生きるか」など是非読んでほしいと書いた。

後日、澤地久恵の本を読んでいたら「親にも教師にもできなかった役割を、かつて本が果たしていた」として、その一冊に吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』をあげていたので読み入った。

「いまほど一人一人が風にゆきぶられていくような社会はかつてなかったかも知れない。まともな生き方をしようとする人たちの足許をすくうように、誠実を蔑視する風潮が吹きぬけてゆく。」

しかし、大人は大人みずからその風に耐えなければならぬ。風に身をまかせ、なりゆきのまま、あつたは風に道をあけてやるような生き方の方が楽であるとしても、それをいさぎよしとしない心がかすかにでもあるのなら、痩せ我慢をして踏みとどまるべきなのだ。

栄達、名誉にするものぞ。われわが道を行く」の大人が減少するころが、子供の不幸の母胎をつくる。」

「不義の富貴」という文字が頭にうかび、必要以上の贅沢をすればいつか罰を受けると子供のようなおそれを感じた。

たとえば一箱百円のキャラメルの一粒ずつが、みごとにアルミ箔で包んである。よく百円で売って採算がとれると思うほど、美しい包装である。しかし、そのために多くの鉱物資源を消費し、電気を消費しているわけである。一粒ずつの包装など余計ではないのか。商品がかくも丁寧にあつかわれているのに反して、自然環境や人の心は大切にされなかった。夢の内容にまみれることになる。

道は見えなくとも……

若かつた日のわたしの悩みは、方向が見定まらないことから発していた。一所懸命生きようとは思つても、自分がいかにあるべきなのか、なにができるのかがわからなかった。

「力をつくして狭き門より入れ」という言葉は胸に刻み、努力を惜しむ気はほとんどなかったが、どこにその門があるのか見えない。(略)

道が見えたから歩いたのではない。ラクではない引揚げ家庭の長女として、働くのは当然のことだった。働いていても人並みに大学は出たい。職業も学業もおろそかにはしたくなかった。すでに高村光太郎の詩、

僕の前に道はない
僕の後ろに道はできる

を知っていた。たとえ細いひとすじの道でも、生きたあとに道ができるように生きてゆきたいと思つていた。

▼三月、弥生の「弥」は「弥栄」の「弥」。いよいよ、ますます木や草が生い茂る月に、五十四号お届けします。ますますお元気で。お便りお待ちしております。梅は咲いたか
桜はまだかいな

